

## 東京藝術大学神将像の彫刻史的意義 — 梁代神将像の伝播に関する検討を通じて —

柘植 健生 (天津市歴史博物館)

東京藝術大学神将像(以下本像)は、飛鳥時代に遡る楠材製木彫像として知られ、その直立の姿勢や単純な甲制・服制は、四川省成都万仏寺址出土で南朝梁代の製作になる中国国家博物館神将像と酷似するなど、梁代神将像との強い結びつきを示している。それにもかかわらず、伝来が不明な点や、梁・朝鮮三国時代神将像の遺例の乏しさから、本像は等閑視されてきた。しかし、私見では、本像は最も梁代神将像に近い像容を持つ日本最古の神将像であり、梁だけでなく百済の神将像をも逆照射し得る可能性を併せ持つ、非常に重要な彫刻史的意義を有する作例と考えられる。

そこで、本発表では、初めに現存作例を基に梁代神将像の輪郭を把握し、それが三国・飛鳥時代の日本へと伝播する様相を検討する。そして、本像をその伝播過程に位置付けると共に、尊格を限らず様式・形式的分析を行うことで、本像の重要性を明らかにしたい。

さて、幸いにも近年大陸の新出作例が増加し、梁代神将像の具体的像容を描くことができるようになった。まず、中国国家博物館像と新出土の成都下同仁路神将像 2 件を見ると、大袖衣、丈高い頸甲が特徴として挙げられるが、胴甲の形式には差があることが分かる。そこで、現存作例に徴する限り最も典型的な梁代神将像を復元するため、本像とそれに酷似する中国国家博物館像、そして最近見出された建康造像たる棲霞山千仏岩神将像の共通項を抽出すると、上記の特徴に加え、左右 2 枚の胸甲、腰帯下のパルメット形の飾りが典型的要素として指摘できるだろう。

一方、他の三国・飛鳥時代神将像では、甲制・服制の面で梁代神将像との径庭が認められる。三国時代神将像の現存作例は、645 年頃の皇龍寺址出土金銅外函神将像と朝鮮中央歴史博物館金銅透彫神将像の 2 例であるが、頸甲の形状が半島南部の古墳から出土した頸甲と類似し、当地の武人像に近い表現が取られていることが理解される。同様の頸甲は、6 世紀半ばの製作と見られる奈良・法隆寺金堂四天王像にも見られ、これは三国時代の甲の影響と見てよい。さらに、法隆寺像がラッパ状の鱗袖を着ける点は隋～初唐神将像を受容した可能性が考えられよう。

それに対し、本像は、甲制・服制ばかりか面貌表現までも梁代神将像と類似し、邪鬼についても箱型の体勢に梁代造像との類似を見出すことができる。また、着衣形式やプロポーションには、百済製の可能性が指摘される新潟・関山神社菩薩像などと共通する部分を有することが目を引く。このように、本像は、梁代造像や 6 世紀末に遡る朝鮮半島の作例と通じる要素が多いため、飛鳥時代でも 7 世紀前半に遡る日本最古の神将像と考えられ、百済造像との類似に鑑みれば、本像から百済の神将像をも復元できる可能性を持つ稀有な遺品として評価できるのである。